



## 東京湾三番瀬保全運動に取り組む

NPO法人 ベイプランアソシエイツ 理事長 大野 一敏

昭和20年8月15日終戦。この時、米軍の周到な無差別爆撃により東京湾岸の主要都市、横浜、川崎、東京、千葉は壊滅し、交通網、電信電話網、水道電気網、全てが機能不全に陥り人々は早速、衣食住難に喘いだ。

日本政府の最初の仕事は「食糧緊急措置令」の施行、「物価統制令」公布施行。そして天皇は国民に向けて食糧危機突破についてラジオ放送を行った。この時、湾岸住民を救ったのが首都圏に横たわる広大な干潟の海「東京湾」だった。夜間の干潮時に干出した干潟を歩けば無数に点在する潮溜りで「ハゼ、カレイ、エビ、カニ」等簡単に捕獲できた。干潟の地中には「アサリ、ハマグリ」等貝類が子供でもバケツ一杯獲るのにそう時間はかからなかった。干潟の沖では「真イワシ」の水揚げが、戦後瞬間的に自然が支配した湾が存在した。

一方、陸側では形振りかまわぬ凄まじい復興劇が展開していた。次に紹介する文章は昭和28年つり人社出版「釣は愉し」竹内始萬著の一節“文化と魚”に当時の様子を知る。「大都市の発展は隣接の自然の状態を一変し、野生の動植物を遠くへ追いやってしまう。東京の近郊には、かつて独歩が愛し蘆花が讚えた武蔵野の面影はなくなってしまった。特色のある雑木林も見られないし竹藪も姿を消してしまった。野兎や栗鼠やそういう小動物もどこかへ行ってしまったし、罠を奪われた小鳥たちも近寄らなくなってしまった。美しい流れもいつか濁ったり、魚族も影をひそめてしまった。それは大都会とその近郊だけに見られる現象ではなく、速度の違いはあるが農山村でも同じ変化が進行しつつある。かつて美しい樹木に覆われていた裾野は切り開かれて耕地になったり、大きい川にいくつものダムが出来て流れが遮断され、水は少なくなって魚族の影は薄れたり、広い道路ができたり、コンクリートの橋がかけられたり、色々



人工的变化が間断なく進行しつつある。」「文化とは野蛮の反対を意味する言葉らしいが、敗戦後の我々の生活、いや日本の姿を見ると食糧は乏しくて、ともすれば栄養失調になりそうだし、衣料も不十分で着替えもなく、そして住宅難にあえいでいる。」「文化的とは一体どういうことなのか。自然の状態を人間の手で変化させ、野生の動植物を駆逐したり征服したりすることが文化の向上発展ということなのか。」「自然の状態が一変して、野生の動植物が影をひそめて行くことを、この上もなく寂びしいことだと思わずにはいられない。」以上は60年前の話だが、昨日今日の話に聞こえる。

東京湾においては干潟の多くは埋立て土地造成され自然環境が激変した。未だに東京都では巨大なゴミの埋立土地造成が進行し、多摩川河口を塞ぐように羽田空港の滑走路が建設された。因みに太平洋を挟む対岸の米国加州のサンフランシスコ湾では、1962年に湾口の突当りに位置するバークレー市で計画発表された4千エーカーの海面埋立に対し、景観が損なわれるという理由でカリフォルニア大学バークレー校の学長夫人らが中心とな



り反対運動が起き、この「サンフランシスコ湾を救え」運動は他市、郡に波及し、大きな盛り上がりを見せた。これはただ単に反対というのではなく、科学的分析、学術的に裏付けられた資料を築き上げていった。そして運動は政治家を動かし、遂に1965年6月湾を守る法律の制定までになった。

この時、我が国では60年に「所得倍増計画」を閣議決定し、62年に運輸省が63～70年度の「臨海工業地帯開発計画」を発表。この年の9月中央公論社刊大宅壮一・桑原武夫・阿川弘之編集「世界の旅」全10刊日本の発見（緑の少ない東京）に、東京湾を小型機で視察。その時のことを次の様に記している。「東京湾は今、土地を求めて、海へ海へと伸びているようだ。埋立地の先に、さらに泥土地帯が広がって、新しい埋立地が出来つつある。パイプから吐き出される泥が白黒のヒトデのような模様を描いて、海を埋めて行く。釣舟は、泥色の干潟の上ののっかっているように見える。そして東京湾は、どこまで行っても、泥の色、泥の色の連続で、今に海が見えてくるかと思っているうちに、やっぱり泥色の千葉県側の岸まで飛び越してしまった。千葉から五井のあたり、この辺も懸命に海に向って伸びている。」「しかしこの泥色の東京湾は、何とも海としては有難味の無いもので、いっそ船の通る路だけ残して、さっさと全部埋立ててしまったらよさそうなきがする。」

この時サンフランシスコ湾では「Bay or River」浅瀬を埋立てていくと湾は川の様になるけどそれで良いの、とキャンペーンを張って運動が進行した。

正に東京湾と対照的な考えの違いがあった。そしてサンフランシスコ湾の目標は、「掛けがえのない天然資源」として改善して次世代に引き継ぐと1968年に湾の将来を50年計画に託した。この湾計画は、いかなる埋立も湾には有害とし、それは湾の生態的バランスを破壊し、魚類や鳥類の一部の生存を危うくする。また湾の水面面積及び水の量が縮小されるこの為湾口から水を流し出す潮流が弱まり貧酸素化が進む。埋立は湾の持つ空気調整的効果を減少し、湾岸域の大気汚染の危険が増大する。以上の理由により現在のサンフランシ

スコ湾では湾の総面積を縮小しないことを原則にし、もし埋立が必要な場合は、埋立面積と等しい海面面積を創出しない限り許可されない。

1999年に計画された埋立を伴うサンマテオ国際空港の拡張工事は未だにストップしている。食糧自給率100%を超える米国が湾は魚類や海洋性植物の「農園」として急速に増加する人口にとって、米国はもとより世界的な食糧資源を増大するという推計しがたい価値をもつようになるかもしれないと考えている。

こうした他国の動きに後れを取っては東京湾岸人としての品格が問われる。そこで1984年、昭和59年東京湾会議を立ち上げ、湾と三番瀬への関心を喚起しようと、豊かな資源の紹介を兼ね「イワシ」・「アサリ」祭り、漁港の賑わいを知る「港まつり」、海の快適さを体験する「ジャズとサンセットのクルージング」、港の景観を高めるために「湾岸の植樹」、防災や交通渋滞の対策として「海上交通」の実証実験、そして湾と三番瀬への思いを知る「シンポジウム」等々ボランティア活動が組織的に継続できるようにNPO法人ベイプランアソシエーターズとして1999年、平成11年に登録され今日に至ります。詳しくはホームページにアクセスを。<http://npo-bpa.org/>

